情報を先取り、タブーに挑戦

財界さっぽろ

昭和三十九年三月三日　第三種郵便物認可
平成十六年十二月一日発行　第四二巻　第十二号〈毎月一日発行〉

特集

札商高向新体制〝副会頭〟で土壇場の攻防
〝ムネオ・千春新党〟で自民党は惨敗する!
世界第2位の軍隊・知られざる自衛隊の〝掟〟
北海道の活断層・危険地帯はこの8つだ
遺伝子組み換え〝みんな知らずに食べている〟
子殺し時代・チャートでわかる〝鬼母〟性格

12月号

巣立て!北海道の起業家

●センターのバックアップによるサクセス事例

北海道最大規模の産業ビジネス展示会として知られる「北海道技術・ビジネス交流会」。一九八七年の開催から数え、十八回目となる今年も十一月十一日(木)と十二日(金)の二日間にわたり、アクセス札幌で開催され、全道各地から二百二十のユニークな企業・団体が集結し、独創性に秀でた製品を展示した。

このイベントに出展することで販売促進はもちろん、販路拡大や新たなビジネスパートナーの獲得に結びつく可能性も高いため、出展を望むベンチャー企業は数多い。

しかし、ベンチャー企業にとっては出展費用を捻出することも容易ではない。「北海道中小企業総合支援センター」では、この出展を支援する事業を行っている。

ちなみに、今年は計三十一社の出展を支援。そのひとつが帯広市で福祉車両の製作、販売を手掛ける「イフ」。二〇〇四年四月に営業を開始したばかりのベンチャー企業だが、その技術力には定評があり、今後の活躍が期待されている企業だ。

「もともとは、ドラッグレース用の車を造る企業に勤務していました。長年の目標としていた日本一のタイトルを獲得したことを機に、この技術を福祉に生かそうと考えました」と内藤憲孝社長。

従来の福祉車両と言えば、新車が定番。しかし、新車を購入するには経済的な負担が大きい。既存の車を安価に、福祉車両に改造することで潜在需要を掘り起こそうと考えた。

内藤憲孝社長

イフ
帯広市西23条北2丁目11-14
☎0155-38-8380
http://www014.upp.so-net.ne.jp/ifif/

イベント当日は様々な機能を搭載した福祉車両を展示した

ドラッグレース用の車を造るには、細部に至るまで車の知識が必要となる。この技術力が福祉車両を作るうえでの大きな武器となった。

内藤社長は、「身内に要介護者がいることもあり、障害者が必要とする機能は把握していました。ただ実際に起業してみるとさらにいろいろなニーズがあります。このニーズを製品化していくのが私の仕事です」と説明する。

こうしたモノ造りをしていく過程で必要となるのが工具などの設備。そして、不足している開業資金の助けとなったのがセンターの「起業化ステップアップ支援事業」の助成金だった。

「金融機関の融資を取り付けるのは本当に難しい。この助成金によって事業を軌道に乗せることができました。また、センターに提出する事業計画書を作って行く中で、ぼんやりとしていた方向性が明確になりました。お金以上に、こちらの方が重要だったと言えるかもしれません」と内藤社長。現在もこの事業計画書を羅針盤にしている。

「日本の場合、福祉車両と言えば、車の乗り降りをスムーズにするためのものがほとんどだが、今後は年金のカットなどにより障害者が積極的に働かなければならない時代が訪れる。そのためにも体の不自由な人自身が簡単に運転できる車を作り、同時に運転の練習をできる場も提供して、自立支援のお手伝いをしたい」と熱い。

「目指すのは便利な車。要介護者だけではなく、妊婦にも年配の人にもやさしい便利な車を造っていきたい」と内藤社長は意欲的だ。

財団法人
北海道中小企業総合支援センター
札幌市中央区北1条西2丁目
経済センタービル
☎011-232-2001（代表）
http://www.hsc.or.jp/

2001年に道中小企業振興公社、道商工指導センター、道中小企業振興基金協会の3団体が統合し、設立。道内中小企業の経営活動を全面的にバックアップすると同時に、経営相談に対するアドバイスや支援施策の紹介も行うなど道内の支援機関の中心的な役割を果たしている。